遠心中に細胞や世界は廻るが、私は？

札幌医科大学医師会
北海道医療大学　予防医療科学センター
河野　　豊

以前にもこの「会員のひろば」に寄稿したことがありましたので、広報部に問い合せたところ再寄稿OKの返事をいただきました。論文を書くのでさえ時間のかかる私ですが、何とか依頼に応じようと思い、制限時間として30分間の細胞の遠心機のスタートボタンを押してから起筆しました。

前回寄稿時に39歳だった私は、念願だったアメリカでの研究留学からの帰国直後で、臨床と研究の双方の重要性を意気揚々と後輩に説いていた青二才の若造でした。それから６年が経過し、長年お世話になった札幌医科大学から今年４月より北海道医療大学に異動しました。40歳代半ばになって仕事も生活もそろそろ落ち着いたかと思いきや、今でも日中は臨床で患者さんの診察を、夜と週末は細胞や動物実験室のマウスとにらめっこしていて、６年前と相変わらずの生活を続けてます。

一方この６年間で臨床も研究も大きく進歩しました。留学先で悪性黒色腫に対する免疫チェックポイント阻害薬の基礎研究や臨床研究の講演会を聴いていたのが、今では日本でさまざまな癌腫で使用できるようになり、なかでも一部の肺癌では標準治療とされてきたプラチナ系の殺細胞性抗癌剤より効果があることも分かってきました。また、「もう１人の自分」と言われてきた腸内細菌の研究も目覚ましく進歩し、糞便移植治療や腸内細菌の酵素で血液型すらをも変えることが可能になってきました。今までクロストリジウムと聞くと、抗生剤起因性腸炎のC. difficileしか想起しませんでしたが、100種類ある残りのクロストリジウムの一部が体内の重要な免疫調節に関わっていたなんて驚きです。これらの素晴らしい研究結果は全て地道な基礎研究者たちのたゆまぬ努力と情熱があってこそです。現時点で非常識なことが、将来いつか常識になっていくのが医学であり、患者さんを診療するにおいても、医者ならぬ医学者として常に勉強してup to dateすることが大事です。

私が留学中に師事していたJerome Ritz先生は、免疫や幹細胞研究の大御所で、数々のトップジャーナルの査読をされてました。彼は基礎研究室のボスでしたが、週１回は必ず外来診療もされていました。日本人のように朝早くから夜遅くまで仕事をし、２週間の夏休みにはデンバーの別荘で論文の査読を何十本もするという、スーパーマンのような方で憧れでした。彼の研究所には世界中から多くのポスドクが訪れ、多くの研究結果を論文にしたことが認められ、昨年ダナ・ファーバー研究所のメンター賞(Mentor award)を取りました。留学中かけがえのない経験をたくさんしましたが、その中でも私が帰国する時の送別会で彼から言われた「研究結果から臨床のヒントが得られることもあるように、臨床から研究のヒントが得られることもあるよ」という言葉（のような気がします）が今でも忘れられません。彼も含めてアメリカの医学研究者の多くはM. D. のみしか持っていませんが、それでも基礎研究に熱心なのは日本とは全く異なる状況で、医学先進国アメリカの凄さを痛感しました。

そうは言っても、日本での私の同世代の友人医師をふと見てみると、患者から信頼されている開業医になったり、全国区の内視鏡治療や化学療法のエキスパートになっていて、この歳になってもまだ研究を地道にやっている自分に焦燥感と劣等感を時々感じます。それでもなお研究をやっているのは、やはり医学研究が心底好きだからかもしれません。今回の震災でも改めて強く感じたことは、一生に一度きりの人生を無駄なく悔いなく走り続けるために、自分が今できることを精一杯やっていくことです。漫画『北斗の拳』のラオウが「わが人生に一片の悔いなし」と言ったように、満足できなくとも後悔しない時間をこれからも真っすぐに過ごしたいです。その結果が今後の医学の発展に少しでも寄与できればいいですが…今はまだ道の途中です。

そろそろ遠心機の遠心時間が終わりそうなので、筆をおきます。

最後に、この度の９月６日未明に発生した胆振東部地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

留学時代の送別会での写真（Jerome Ritz先生と私と娘）